

セラミック九州

佐賀県立九州陶磁文化館報

発行 2013.3.31

編集 佐賀県立九州陶磁文化館

代表者 鈴田 由紀夫

〒844-8585 佐賀県西松浦郡有田町戸内乙3100-1

TEL.0955-43-3681 FAX.0955-43-3324

http://www.pref.saga.lg.jp/at-contents/kanko_bunka/k_shisetsu/kyuto/

E-mail:kyuto@pref.saga.lg.jp



ひらがた 平型めしわん

館蔵資料 (9096~9164-23、
9449~9474-23)

田代 勇氏贈

森 正洋 (1927~2005)
平成3年 (1991)

口径：15.0cm
高さ：4.5cm

森正洋は佐賀県塙田町（現嬉野市）出身で、国内のみならず世界的にも高く評価された陶磁器デザイナーである。多摩造形芸術専門学校（現多摩美術大学）卒業後、長崎県窯業指導所を経て、長崎県波佐見町の白山陶器で陶磁器デザイナーとして活躍した。「日常食器の豊かさ」を追求し、100点以上のグッドデザイン商品を生み出すとともに、イタリア・ファエンツア国際陶芸展金賞をはじめ、数々の賞を受賞した。

平型めしわんは1992年に発表した作品で、本人が「毎日使うお茶碗が一番むずかしい」とい続け、試作から10年ほども時間をかけたという。「大ぶりで浅めの平形の茶碗は、とても食べやすくて具合がよい。そして、碗の内側が広く見て楽しめる」というように、さまざまな文様、釉色が楽しめる。種類は発表当初から徐々に増えて、今では300種類ほどにのぼるという。

平成25年度特別展のお知らせ

「江戸のモダニズム 古武雄～まぼろしの九州のやきもの～」展

○趣旨

唐津焼といえば、桃山時代の絵唐津や朝鮮唐津に代表される茶陶としての唐津を思い浮かべますが、これらは主として岸岳など佐賀県北部地域で作られてきました。一方、江戸時代初期を中心に佐賀県南西部の武雄などで焼かれてきた単色釉、二彩、三島などの技法を用いた唐津系陶器があります。これらの大膽で迫力がある作品は近年、「知られざる唐津」「江戸のモダニズム」として注目をあび、特に最近「古武雄」などと呼ばれるようになりました。

本展では、「古武雄」の代表作品を時代や技術別に並べて展示するとともに、初期伊万里など関連する有田焼との比較展示も行い、その大胆にして美しい「古武雄」の魅力を余すところなく伝えようとするものです。



鉄絵緑彩松樹文大平鉢 17世紀前半
肥前・武雄 口径49.2cm 個人蔵
佐賀県重要文化財

○主催 佐賀県立九州陶磁文化館

○会場 佐賀県立九州陶磁文化館

第1・第2展示室

○会期 平成25年10月5日(土)～11月24日(日)
46日間

○休館日 月曜日(10月14日、11月4日は開館)

○出品点数 80点(予定)

○観覧料 無料

○展示解説 会期中毎週土曜日
14:00～15:00

○関連行事 武雄市の荒踊りなど民俗芸能の開催
物産市等による武雄と有田の観光PR
記念茶会など



象嵌鶴文大平鉢 17世紀前半
肥前・武雄 口径49.2cm 個人蔵
武雄市重要文化財



白泥鉄絵緑彩松樹鶴文甕 17世紀中頃～後半
肥前・武雄 口径34.5cm 個人蔵



緑褐釉流掛唐草文六耳壺 17世紀後半
肥前・武雄 高さ41.4cm 個人蔵

テーマ展 春期茶道具名品選

- 会期 平成25年3月19日(火)～4月7日(日)
 ○内容 館蔵資料を中心に茶の湯に使用する茶碗や水指、茶杓、棗などの作品を展示します。
 ○展示数 20件 30点(予定)
 ○会場 第1展示室



褐釉耳付水指 銘「柴の庵」
肥前・唐津焼 1590～1610年代

新収蔵品展 II

- 会期 平成25年6月21日(金)～7月15日(月)
 ○内容 平成24年度に寄贈を受けて、新たに館蔵となった古陶磁などの作品を展示します。
 ○展示数 200件 230点(予定)
 ○会場 第2展示室

テーマ展 やきものバード・ウォッチング

- 会期 平成25年8月3日(土)～9月1日(日)
 ○内容 鷹や鶯、水鳥、鶴などさまざまな鳥の文様や鳥形の陶磁器を展示。バード・ウォッチングさながら陶磁器の「鳥」が楽しめます。
 会期中に夏休み子どもイベントも開催。
 ○展示数 50件 60点(予定)
 ○会場 第1展示室



白磁岩鷹香炉 明治
肥前・三川内 高取紀子氏贈

新収蔵品展 I 寄贈記念 森正洋-使う器-展

- 会期 平成25年5月17日(金)～6月16日(日)
 ○内容 森正洋(1927～2005)は佐賀県塩田町(現嬉野市)出身の陶磁器デザイナーで、国内外で高く評価されています。平成23年度に寄贈を受けた森正洋デザインの陶磁器等を展示します。
 ○展示数 200件 400点(予定)
 ○会場 第1展示室



P型コーヒーカップの試作品
森正洋 1972年 田代 勇氏贈



染付水葵文大皿 1810～60年代
肥前・有田・南川原山 工藤吉郎氏贈

テーマ展 新春展 干支・馬の文様

- 会期 平成25年12月14日(土)
 　～平成26年1月13日(月)
 ○内容 平成26年の干支にちなんで、江戸時代から近現代までの馬の形や文様の陶磁器を展示します。
 ○展示数 40件 50点(予定)
 ○会場 第1展示室



釉彩盛上馬文大皿 昭和29年
初代松本佩山 矢野量彦氏贈

ヨーロッパの肥前陶磁器を訪ねて9 パリの肥前磁器コレクション

Hizen Porcelain in Paris

パリ (Paris) にはギメ (Musée Guimet)、セルニスキ (Musée Cernuschi) のような、日本の研究者にもよく知られた、東洋の文物を収蔵する美術館があり、ギメには寄贈された数多くの日本陶磁が展示されているのをご覧になった方も多いと思う。今回はパリのもと個人の邸宅で現在美術館になっている館に収蔵されている肥前磁器を紹介する。これまで紹介してきた英國各地の貴族の館に残るコレクションと違い、今パリにある肥前磁器は収蔵年代がずっと遅く、それまでどこに収蔵されていたものか判らないのだが、これからパリを訪れる研究者になにがあるかをお知らせできれば幸いである。

曾て英國貴族の館の調査で、壯麗なシャンティエや金属の飾りの付けられた肥前磁器の丈の高い蓋付壺はパリからとかよく聞かされたものであったが、今回パリとシャンティイ (Chantilly) を訪れ、フランス革命後いかに多くの美術工芸品が他国に流出したかを知り、英國の貴族の館にある肥前磁器にもフランスから流出した品が相当入っていることが想像され、英國の肥前磁器の受容についても、各コレクションの所蔵目録の再検討が必要との感を深くした。

I. カルナヴァレ美術館 (Musée Carnavalet)

最初16世紀半ばに建てられたカルナヴァレ館 (Hotel Carnavalet) が1880年に、次に隣接する17世紀後半建設のル・ブルティエ・ド・サン=ファルジョー館 (Hotel Le Peletier de Saint Fargeau) と繋いで1989年に、パリの歴史館として公開している。近隣で壊される館の内装を保存のためこの館に移し、内装と家具を時代を合わせて展示し、肥前磁器はカルナヴァレ館の18世紀の内装の部屋に置かれているが、今回見つけ出した7点のうち、館の所蔵目録にある5点は、骨董商のMrs. Henriette Bouvier

TANAKA, Shigeko

田中恵子 ●日本アジア協会副会長
●東洋陶磁学会（日本）会員
●The Oriental Ceramic Society (London) 会員

が1965年に寄贈したものとのことで、その部屋に帰属するものではない。

1) 初期色絵山水文壺 (図1,2,3,4)

37室の観覧ルートから離れた奥の壁際の小箪笥の上にあり、通路にある説明には中国・康熙年間とあるが、遠目にも肥前の初期色絵(1660~80年代)とわかる。後日、館の担当者が接写して送ってくれた写真を見ると、蓋付き壺の破損した上部を切り取って鉢としたもので、口縁を金属で覆い底部を覆う金属の台と口縁の金属との間を二箇所で繋いで持ち手をつけている。類品としてカッセル (Kassel) のコレクションに、小ぶりの同じ文様の一対の蓋付壺 (Porzellan aus CHINA und JAPAN, p.44, p.418, No.204)、プリンセスホフ (Princessehof) 美術館に蓋なしの壺 (柿右衛門様式磁器調査報告書歐州編 p.350, No.816) があるが、大きさとしては、柴田コレクション V p.36 参考27色絵山水文壺が近い。

2) 色絵婦人像 (柿右衛門人形) 2体 (図5)

43室「ルイ (Louis) 15世時代 (1715~74) の青のサロン」と名付けられた部屋の二方の壁に一つずつ取り付けられた小さな木彫金彩の台 (Inv. MB 143 & 144) の上に乗っているが、この館の所蔵品ではなく、プティ・パレ美術館 (Musée du Petit Palais) から委託されたもので、二体の着物の色調は似ているが、文様は異なる。なお、この部屋の内装はルイ15世時代に旧コンティ河岸 (quai de conti) 13番地に建てられたブリュラール・ドゥ・ジャンリス邸 (l'hotel Brulart de Genlis) が1920年に取り壊された際に外されて1923年にカルナヴァレに移されたものとのことである。

3) 色絵鉢 1対 (図6)

38室「ルイ15世時代の灰色のサロン」と名付けられた部屋にある。口縁と底部を金属で覆い、脇に上下を繋ぐ金



図1,2,3,4 初期色絵山水文壺
1660~80年代
高さ21cm 径23cm
金属の装飾は18世紀前半。
Inv.C1422
写真提供Ms.Hurel,Carnavalet



図5 色絵婦人像
1670~90年代
高さ39cm
Inv.P.P.Dut.A 41-1,
Inv.P.P.Dut.A 41-2
写真提供 Ms.Hurel, Carnavalet



図6 色絵鉢 1対 1700~40年代 高さ19.4cm 口径 22.3cm 金属の装飾は1720年代パリ。Inv.C1435, Inv.C1436



図7
色絵桶形角瓶 高さ27cm 径12.2cm
1670~90年代 Inv.C1431,C1432
色絵菱形蓋物 高さ15cm 巾18cm 奥行き11.6cm
Inv.C1411,C1412

属の飾りと持ち手がつけられている。cache-pot、植木鉢カバーとあるが、パリ在住の美術史研究家のモアンヌ前田恵美子氏によればワインクーラーに使われたのではとのこと。1)の破損した山水文壺も同じ用途に転用されたものか。

4) 色絵桶形角瓶2個、色絵菱形蓋物2個(図7)

52室の暖炉の上に並べられている。桶形角瓶は器面4面に違なる文様が描かれ、提げ手と底部に金属の飾りが付けられている。アシュモレアン(Ashmolean)美術館に同型であるが金属の飾りがなく、文様も異なる類品(Porcelain for Palaces, p.132, No.96)がある。菱形の器は薄い蓋と身との間に金属の透かし飾りを挟み、底部にも金属の台を付けている。

II. ニッシム・ドゥ・カモンド美術館 (Musee Nissim de Camondo)

18世紀の美術工芸品を収蔵するためカモンド家が1911年に建てた館と収蔵品が1935年に美術館として公開された館で、東洋陶磁は清朝の色絵が多いが、奥まった暖炉の上に置かれた一対の鯉は肥前と思われる。

1) 色絵鯉置物 1対(図8)

類品はフィツウィリアム(Fitzwilliam)美術館(Porcelain for Palaces, p.189, No.178)と、ハーグ(Hague)市立美術館(有田ポーセリンパーク平成5年 11月開催のオランダ・ハーグ市立美術館所蔵品からの「陶磁の東西交流展」p.65, No.61)にある。

III. シャンティイ城内のコンデ美術館 (Musee Conde, Chantilly)

柿右衛門様式を模倣したシャンティイ窯の製品が保存されているコンデ美術館には、肥前磁器があるのでその報に電車で30分の城を訪ねた。14世紀にパリの北東約40kmの地にその礎が築かれたこの城は、フランス革命によって破壊され、最後、アンリ・ドルレアン(Henri D'Orleans)こと、オーマル公爵(Duc d'Aumale)が、英国亡命中に買い入れたフランスから英國に流出した美術品を持って帰国してから今日の姿に修復され、1898年に公開された。



図8 色絵鯉置物 1対 18世紀前半



図9 蓋付壺

左：肥前・有田・柿右衛門様式 1670~1700年代
右：フランス・シャンティイ窯

1) 蓋付壺 2個(図9)

ルイ・アンリ・ド・ブルボン(Louis Henri de Bourbon)公によってシャンティイに、柿右衛門様式のコピーを作るため1725年に設立され、1789年まで続いた窯で生産されたさまざまな柿右衛門様式の製品が陳列されているなかに、1点、肥前の柿右衛門様式の蓋付壺がシャンティイ窯の同じ器形の製品と並べて展示されている。

2) 色絵菊牡丹文八角瓶 1対(図10)

暗い部屋のガラス戸棚の上方の棚の両端に置かれているのを望遠で撮った写真だが、類品はカッセル(Porzellan aus CHINA und JAPAN, p.438, No.216、1993年柿右衛門展図録p.154, No.116)、ドレスデン(Dresden)(柿右衛門様式磁器調査報告書歐州編p.292, No.595, 596)、柴田コレクションV p.137, No.188もあり、いずれも高さは23cmである。

3) 染付蒔絵蓋付壺 2個(図11)

1847年5月に1500フランで購入され、漆の装飾部分は恐らくヨーロッパで付けられたものとの説明がついている。どちらも蓋の摘みの部分がなく、金色の装飾で覆われている。

4) 色絵蓋付壺 6個(図12,13)

赤金の色絵の2個一对が2組と、それに緑、黒などの色が加えられた2個一对が1組ある。6個とも蓋の上には鳥ないし動物様の摘みがついているが、その中の一对は摘みが異なっており、高い棚の上に並んでいるのを下から見たのでは、この摘みの部分がオリジナルかどうかはわからない。

カルナヴァレ美術館への問い合わせは、横浜美術館特任研究員の猿渡紀代子氏のご紹介で、カルナヴァレのMs. Roselyne Hurelと連絡がとれ、初期色絵山水文壺の全面、梯子をかけて撮影された柿右衛門人形と、Ms. Hurel自ら撮影された写真が蔵品目録のデーターと共に送られてきた。モアンヌ前田恵美子氏にはCarnavaletまで赴いて説明のデーターと現場を見て下さりご教示を賜った。写真の年代は九州陶磁文化館にお願いした。ここに記して心からの感謝の意を表したい。



図11 染付蒔絵蓋付壺 1690-1710年代
高さ73cm 径42cm 底径21cm
Inv.GA1561,1581



図10 色絵菊牡丹文八角瓶 1670~90年代



図12,13 色絵蓋付壺 18世紀前半

平成24年度特別企画展の報告

「将軍家献上の鍋島・平戸・唐津-精巧なるやきもの-」展

○主 催 佐賀県立九州陶磁文化館
○会 場 佐賀県立九州陶磁文化館
第1・第2・第3展示室
○会 期 平成24年10月6日(土)
～11月25日(日) 51日間
※会期中無休

○展示内容

江戸時代、参勤交代とともに、全国の諸藩は国元の産物を徳川将軍家に献上する例年献上が義務付けられました。将軍家には全国から様々な産物が献上されましたが、その中で陶磁器を献上したのは六藩程度で、うち三藩を全国唯一のやきもの先進地域であった肥前地方の佐賀藩・平戸藩・唐津藩が占めました。全国のやきものの生産地のなかでもトップレベルの技術を誇り、最高権力者が求める陶磁器を探算度外視で作ったのが肥前地方です。その理由と製品の魅力などを紹介する初の展覧会です。

全国から集めた名品の数々に新資料を加えた最新の

研究成果を紹介するもので、総計227件535点の作品を展示・紹介しました。

○観覧料 大人600(500)円、大学生300(200)円

()内は20名以上の団体料金

○記念講演会 10月20日(土)13:30～15:00

「将軍家献上の鍋島・平戸・唐津とは」
大橋康二 (当館 特別学芸顧問)

○展示解説 10月6日(土)より毎週土曜日

14:00～15:00

○関連行事

碗琴コンサート 10月20日(土)12:30～13:15

記念茶会

・裏千家 10月27日(土) 13:00～15:00

・壳茶流 11月17日(土) 13:00～15:30

献上のテーブルコーディネートショー

11月4日(日曜日) 13:30～15:30

・丸山洋子氏 (食空間プロデューサー)、
鈴田由紀夫 (当館館長)



展示風景



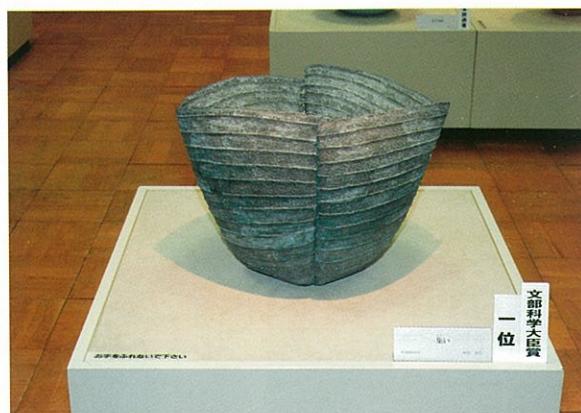
展示解説の様子

第109回 九州山口陶磁展

○会期 平成24年4月29日(日)～5月10日(木)
12日間

明治29年に「有田陶磁品評会」として発足した本展覧会は、九州山口各県の優れた陶磁器作品を一堂に展示し、伝統的工芸の継承と陶磁器産業の発展を期することを目的として開催され、今回第109回目を迎えました。

今回の展覧会では、第1位の神田和弘氏の「集い」をはじめ、92点の入賞・入選作品が展示されました。



第1位 文部科学大臣賞
神田和弘 集い

新収蔵品展Ⅰ 寄贈記念 澤田痴陶人の世界

○会期 平成24年5月19日(土)～6月17日(日)
26日間

澤田痴陶人(1902～77)は京都出身の陶芸家、陶磁デザイナーで、岐阜、佐賀、長崎で活躍しました。平成9年(1997)にイギリス・大英博物館で日本人陶芸家として初めて個人展覧会が開催されたのを機に、その名が国内外に広く知られるようになりました。

展覧会では平成23年度に寄贈を受けた痴陶人の陶磁器作品や関連資料(絵画、スケッチ、道具など)444件564点を展示しました。



展示状況

新春展 花の器展

○会期 平成24年12月14日(金)
～平成25年1月14日(月)
27日間

花を生けることは古くは仏教における供花(くげ)から出たのですが、しだいに宗教的な意图から離れ、立花(たてはな)として、座敷飾りの中で花瓶に花を立てて鑑賞することが行われました。また江戸前期に園芸が江戸などで流行し、いくつもの園芸書が出版されたり、植木市もさかんに行われました。

展覧会では花入や花瓶、植木鉢など、江戸時代から近現代までのさまざまな陶磁器の花の器64件64点を展示しました。



展示状況

新収蔵品展Ⅱ

○会期 平成24年6月23日(土)～7月16日(月)
21日間

平成23年度に寄贈を受け、新たに館蔵となった唐津や伊万里といった古陶磁や明治の有田焼、また前田泰昭、小野次郎といった現代作家の作品など266件344点を展示しました。



展示状況

夏のテーマ展 夏休み やきものの水族館

○会期 平成24年8月4日(土)～9月2日(日)
26日間

魚、貝、海老、蟹など川や海に棲む水の中の生きものは、やきものの形や文様として古くから描かれてきました。江戸時代の有田焼では、染付や色絵などの多彩な装飾技法で水の中の生きものが描かれ、特に海老や滝を登る鯉など、おめでたい意味が込められたデザインが人気でした。

展覧会では、吉伊万里から現代陶芸作品まで、水の中の生きものが表現された陶磁器62件124点を展示しました。

また8月10日(金)、11日(土)には、やきものに描かれた魚をスケッチしたり、ジグソーパズルやマイ風鈴づくりを楽しむなどの夏休み子どもイベントも開催しました。



夏休み子どもイベントの状況

シリーズ やきものの技法(44)

さび
鉄
くわ
釉

呈色剤として鉄(Fe)を含む釉薬は、鉄の含有率に応じて鉄釉、褐釉、黄釉などに分かれるが、ガラス分が少ない鉄泥(鉄漿)を掛け光沢に乏しい鉄錆色の被膜に覆われたものや斑紋状に褐色が浮き出たものを特に錆釉(錆釉)と呼んで区別している。ただ、錆釉と鉄釉はガラス分の割合や焼成温度により似通った仕上がりとなるものがあり、見分けが難しい場合も少なくない。

肥前磁器では、草創期段階の1610年代から1630年代までに導入されており、いわゆる初期伊万里様式の中でも新しい段階である1630年代から1650年代に青磁釉・瑠璃釉・透明釉などとの掛け分け・塗り分けや染付と併用した作品が多くみられるようになる。このうち、錆釉を白抜きにして染付文様を施す一群は、かつては加賀・吸坂の土を使って焼いたものとされ、「吸坂手」と呼ばれていたが、現在は山小屋窯をはじめとする有田の窯場で生産されたことが明らかになっている。

17世紀後半の肥前の青磁では、窯詰のために蛇ノ目釉剥ぎした鉢・皿の高台内に鉄泥を塗るが、これは素地に含まれる鉄分の関係で無釉部分が赤茶色に発色する中国・龍泉窯の青磁に霧囲気を近づけるための工夫と考えられ、1640年代頃から出現する口錆も、手本である中国・景德鎮磁器に倣ったものである。錆釉は、肥前磁器の多様な技法の一つとしてその後も繰り返し用いられるが、18世紀以降はむしろ鉄釉と呼んだ方がふさわしいような光沢のある製品がほとんどになる。

肥前陶器では、17世紀中頃以降の甕・瓶・皿などの底部に鉄泥を塗るものがあり、水漏れ防止と共に装飾的な効果も狙ったものであろう。(徳永貞紹)



錆釉染付鶴文輪花小皿
肥前・有田 1630~1650年代
柴田夫妻コレクション3-51
口径15.1cm、高さ3.0cm、底径7.0cm

シリーズ やきものにみる文様(44)

つばき
椿
もん
文

椿は、ツバキ科ツバキ属の常緑樹。日本原産で野生種の標準和名はヤブツバキ。古くから品種改良され、園芸品種は2,000種を超えるともいわれる。

古くは『日本書紀』に大伴家持が白い椿を天武天皇に献上したとされ、『万葉集』などにも散見されるが、室町時代まではさほど芸術の題材として注目された存在ではなかった。しかし、風雅を好む足利義政の頃になると、彫漆、螺鈿などの工芸品の題材として椿がいくらか見られるようになる。そして、豊臣秀吉は茶の湯に椿を好んで用いたといわれ、椿寺として知られる京都・地藏院の椿は、元々、加藤清正が朝鮮半島から持ち帰って秀吉に献上したものを、北野の大茶会の時に秀吉が同寺に献木したものと言われている。

さらに何といっても、江戸時代、二代将軍徳川秀忠が椿を好み、それが江戸の園芸ブームのきっかけのひとつだったといわれる。そのため芸術の題材としての椿が広く知られるようになり、この時期、種々の園芸書や『百椿図(ひゃくちんず)』のような図譜も多く描かれ、絵画、彫刻、工芸品へ椿が定着する。

また、茶道においては、椿は炉の花(11月から3月頃までの炉を用いる頃の茶花)の代表とされ、冬を飾る数少ない花の木として、春の到来を約束してくれる重要な花といわれている。

肥前磁器においては、いわゆる初期伊万里の時代から椿文が描かれている。もともと椿は、災いを払い、魔除けの力を持つ、縁起の良い植物とされており、椿文は古代より神事に欠かせない木とされ、吉祥文様のひとつである。写真の作例は鍋島焼の代表作で、幹は力強く染付で表現され、葉は染付と上絵の黄と緑、花は上絵の赤で描かれている。裏文様が七宝結文であるため、将軍家への献上品のタイプではないが、吉祥文様である椿文を描いた同作品は鍋島焼にふさわしい意匠であり、将軍・秀忠の椿好みやその後の園芸ブームとの関連性を示唆するものといえよう。(宇治 章)



色絵椿文皿
肥前・鍋島藩窯 1700~20年代
口径20.2cm、高さ5.9cm、底径11.0cm